

(巷説)

永井村の兵助

筑波山名物 // ガマの油売り // 口上

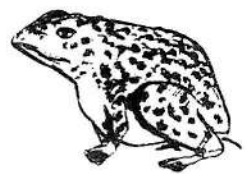
サーサーお立合い 御用とお急ぎでない方はゆっくり聞いておいで 遠目山越し笠のうち、聞かざる時は物の出方善悪黒白がとんと分らない。山寺の鐘がゴーンゴーンと鳴るといえども鐘に撞木を当たえなければ鐘が鳴るのか撞木が鳴るのか とんとその音色が分らない。

サテお立合い 手前ここに取り出したるは陣中膏は、これ、ガマの油、ガマといたって、そこにもいるここにもいるという物とは物が違うよ。ハハアーン ガマかガマなら俺んとこの縁の下、流し下にゾロゾロいるというお方があるか知れないが、あれはガマとはいわなただのヒキガエル、イボガエル、何の薬石効能はないよ。お立合い、手前のは これ四六のガマだ 四六 五六はどこで見分ける。前足の指が四本で後足の指が六本これを合せて ひき面相は四六のガマだ。

サーサーお立合い このガマどこに住むかというのと、御当地よりはるか北、北は常陸の国に筑波の郡 古事記、万葉の古より関東の名山として歌われております筑波山のふもと、おんばこという露草薬草食らって育ちます。

サテお立合い、このガマからこの油を取るには、山中深く分けいって捕えきましたるこのガマおば四面鏡張りの箱の中にほりり込む、サーガンマ先生、巳の見難い姿が四面鏡に映るからたまらない。

ハハアア俺は何と見難い奴だろうと、巳の見難い姿を見てびっくり仰天巨体より油汗をばタラーリタラーリと流す。これを下の金網にすきとりまして柳の小枝をもって三七は二十一日の間トロリトロリと煮たきしめ赤いしん砂にやし油、テレメンテーナマンティカかかる油をば、ぐっと混ぜ合せてこしらえたのが、これ陣中膏はガマの油だ。サ



テお立合い、このガマの油の効能はというと、しつ、がんがさ、よう梅毒、ひび、赤ぎれ、しもやけの妙薬、まだある前にまれば陰金田虫、後にまれば出痔、イボ痔、はしり痔の他切り傷一切まだある。大の男が七転八倒畳の上をゴロンゴロンと転がって苦しむのがお立合い、これこの虫歯の痛み、だが手前のガマの油をばぐっとまるめて歯の空ろにつめ静かに口をむすんでいる時には、熱いよだれがタラリタラリと出ると共に歯の痛みはピタリと止まる。まだまだあるよお立合い、刃物の切れ味をも止める。サテお立合い、手前ここに取りいだしたるは我家に昔から伝わる家宝正宗が暇に明してきたえたという代物である。よく切れる。エイッ抜けば玉散る氷の刃、ここにちようど一枚の紙があるから切っておめにかけよう。

一枚の紙が二枚、二枚の紙が四枚、四枚が八枚、八枚が十と六枚、十六枚が三十と二枚、三十二枚が六十四枚、六十四枚が一束と二十八枚、

ほれこの通り細かくよく切れた。ふっと散らせれば比良の暮雪は嵐山の落下の吹雪とごさい。お立合い、サテお立合い、これ程よく切れる天下の名刀でも一度このガマの油をばつける時たちまち切れが止まる。前につける、後につける。サアアどうだ たたいて切れない、押しても切れない、ひいても切れない。サテお立合い、お前のガマの油というやつは、切れる物をただ鈍にするだけだろうというお方があるかしのれないが手前大道芸人はしているが金看板は天下御免の油売り、そんなインチキはやり申さぬ、この様にきれいに拭きとる時切れ味は元にもどる。ハイ この通りだ。さわっただけでも赤い血がタラリタラリと出る。

サアアテお立合い、お立合いの中にそれ程、利き目あらだかなガマの油いったい一貝いくらだろうというお方があるか知れないが本日は、はるばる出ばつての大安売り。男は度胸、女は愛嬌、山で鳴くのはホーホケキョウ、清水の舞台からまっ逆様に飛びおりたと思つて、二百文というところ半額の百文ではどうだ。サアアどうだ、この様にガマの油の効能が分つたら遠慮は無用だ、分つたらどしどし買つてきな買つてきな。

永井平助（林 正一）

がまの油の口上で有名な初代永井村兵助は、永井のどこの家の先祖であるかをよく聞かれるが、誰もわからない。一体そんな人が実在したのだろうか。とにかく昔のことであるから誰も立証する人はいない。

たまたま田宮ばやし伝承者代表の伊藤三雄氏から「筑波のガマ祭りの連中から永井村の兵助について知りたがっているから調査してほしい。」という依頼があり、急に関心を持ち調査を始めたのであるが、前にも述べたように記録が無いので、昔からの言伝えや古老の話など、それに子ども頃、明治時代神立の僧森泰良兼務住職から聞いたおぼろげな話をまとめてみたが真偽については責任は持てない。

平助の少年時代

兵助は小さい時、平助と言った。兵助の名は、江戸へ出てから江戸町奉行から帯刀を許された時に兵助の名をもらった。それまでは平助で通った。

平助の父佐助は永井村の農家育ちであったが、妻が病弱だったので、永井村（普門院）が焼けて再建（延享五年二三年前）された時に、名主の世話で長男（一人っ子）の平助を連れて、親子三人で寺の小使い役として雇われた。

当時平助は九才であったが、生まれつき頭がよく、機転もききまめまめしく働くので、住職からも非常に可愛がられ寺小僧として採用された。

丸坊主になり衣を着て毎朝住職と共に朝の読経するのであった。もちろんその頃は学校が無かったので、百姓町民は学問などは習うことが出来なかつた。しかし平助は頭がよい位であつたから住職から手習いを教わり、十二・三才ですでに論語・孟子・大学なども読みこなせるようになった。

母の死亡

母は前にも述べたように病弱であつたので、平助が十二才の時に他界してしまつた。

平助や父はどんなに悲しんだことだろう。その後佐助は後妻（おたね）をめとり、子どもも生まれた。子どもが生まれない前は、おたねの平助に対する風当りはそれ程でもなかつたが、自分の子が生まれてからは差別をつけ、ことごとくに平助にあたり散らし虐待するのであつた。平助はこんな意地悪い継母と同居しているのは、つくづくいやになり一日も早く解放されたかつた。

たまたま宝暦年間（二二三年前）に寺の客殿庫裡（住職や家族の居間や台所）の附属建物が焼失したので、平助等の住むところもない有様となつた。平助はこれ幸いと住職や父に相談し、どこか適当な所へ行つて働くことにしたいと言ふと、住職もいたく同情していくらかの路銀をくれた。

平助江戸へ旅立つ

時に年令十七才、あてもなく寺を出たが、小さい頃江戸の話を知つたことがあるので江戸へでも行つたら何とかなるだろうと陸前浜街道を南へ急いだ。平助は利根川の渡しをわたり、我孫子の宿場までくるとさすがに疲れ果て、茶店で一休みしていると、小肥りの五十がらみの男が平助の側へ腰をおろした。この男は江戸の深川で木場問屋の太兵衛といつて、所用あつて生まれ故郷の下総国へ来たその帰りであつた。

太兵衛は平助をじろじろ見ていたが、

「おいあんちゃん、これからどこへ行くんだ。」

「おら江戸へ行くんだ。」

「何しに行くんだ。」

「職をさがして江戸で暮らすんだ。」

「それはいい考えだが、ただ当てもなく行っただって駄目だ。どうだ、わしの所で働く気はないか。給金も奮発するよ。おまえの体格じゃ働けるようだ。」

平助は別段行く先きの当てがあつたわけではないから早速承知した。言われるままにその日は我孫子の旅館に太兵衛と同宿した。翌朝二人は早く宿を立ち、その日の夕方深川の木場へ着いた。

木場（材木屋）で働く

平助の毎日の仕事は、いかだで運んできた大きな丸太の木材を仲間といっしょに陸上げすることであつた。年の一番若い平助は朝は早く起き一生懸命働いたので、主人始め兄貴仲間からも可愛がられた。

しかし生まれて始めて水中から陸上げする重労働は並大抵ではなかつた。特に冬は水仕事なのであかぎれやしもやけに悩まされ、指先などはくずれ落ちそうになつてしまった。

浅草観音縁日へ

平助はある休日に浅草観音様の縁日に出かけた。参道の両側や空地には、いろいろな露天商が軒を並べおもしろいおもしろいのきり口上でのどをからしながらくましく立て、客を呼んで売らんとしている商魂を見せつけられた。これはおもしろ



ろいなあーと思つた。

その帰りがけに生ぐすり屋（漢方薬店）へ立ち寄りしもやけの薬を買ってつけたところ、今までぐじゃぐじゃになつていた指がかわいてきた。数日つけたらほとんど治つてしまつたので非常に喜んだ。

一体こんなに効く薬はどこで作られたのであろうかと効能書を見ると「製造元常陸国筑波」なんだ生まれ故郷の常陸国ではないか。

そしてやけど・しもやけ・あかぎれ・虫さされ・たむし・できもの・その他の皮膚病によろしとの効能書である。これまで筑波山の話は聞いていたが、この効能書と貝殻にはいった膏薬を眺めていると急に筑波山が、生まれ故郷のようになつかしくなり行つて見たい気持ちになつた。

平助の筑波参り

その先木場問屋仲間の講中が筑波参りをすると言ふことを聞いたので、その一行に加えてもらふことになつた。一行は神々しい筑波神社に参拝し、それから山登り。

山上尾根の参道は険しく、いろいろの形をした奇岩、珍石がそこかしこに起伏して、面白い様相を呈している。

中でも眼の前にぬっと現われた大きなガマ石の頭の上に多数の小石がのせてある。この小石はおそらく何かの祈願のためにのせたのであろう。

その様相が自分のしもやけのたゞれた形によく似ている。これ等をうまくかみ合わせて見たらどうだろう。

平助の頭の中は何か閃きがあつて走馬灯の如くかけめぐるのであつた。

帰り道すがら……：

しもやけーガマ石ー筑波ー陣中膏薬ーガマぐすりー大道で売つて見るーしゃべる（口上）などを交互に言葉、関連

などについて頭の中で並べてみた。陣中　ガマの油ではどうだろう。帰ってきてもそのことだけが頭へこびりついて夜もろくろく眠れなかった。

後鉢巻の襷がけ

そこで先ず前にも行ったことのある浅草観音様の縁日へ出かけて行って大道商人が、民衆の心理をうまくつかんで言葉巧みに口上よろしく客を呼び寄せ、一生けんめいに売らんとしている風景をつぶさに研究した。

帰りがけに菓を思い切って大量に仕入れて、一晩中かゝって口上書を作りあげ、みんなの寝静つた隙をみて材木置場へ行って一心に大きな声で練習した。

まあこれでよいと自信をつけ、早速縁日へ出かけて行って、やって見たが、あがってしまっておちつきがなく、田舎育ちの悲しさで、ぎごちなく、それに方言が多くて自分ではうまくやった積りでも、江戸っ子にはさっぱりわからない様子。

さすがの平助も、沢山仕入れた菓を前にして、へたばってしまった。よくよく考えたあげく何とかうまい方法がないものかと近所の講釈師のところへ泣きついた。

講釈師は先ず平助の作った口上をやらせて見た。平助が一生懸命にやるのを見て、講釈師は、にやにや笑いながら終るのを待って、

「なるほど、然し、おまえの口上演出では駄目だ。客をグッと吸いつける目玉言葉が無い。それではまずい。こんな風にしてみたらどうだろう。まず、タラーリ、タラーリと油汗を流す。トロリ、トロリと煮つめましたるが、陣中膏ガマの油。この辺のところはゆっくりと気分を出して。……取り出したるは夏なお寒き氷のやいば、一枚の紙が二枚、二枚が四枚……六十四枚ふっと散らせば比良の暮雪は雪降りの姿。こゝがこの口上の最高潮（クライマックス）

だ。いかわかったか。」

「それから、おまえのその服装恰好では駄目だ。黒紋つきに白さらしの袴掛、後八巻の袴姿。これでやって見ろ。」
講釈師は自分で身振り手振りまでして、口上のやり方を丁寧に教えてくれた。

脇差の使用を許さる

露天商のならんだ大道に出た平助は教えられた通り、竹光に銀紙を貼った刀をふりまわして、盛んに「夏なお寒き氷のやいば云々」をやっていると、そこへ江戸町奉行が通りがかり、
「これは面白い。これ大道芸人、苦しい。町人に佩刀は許されないが、お前がこの場で口上する時に限り、脇差の使用を許可する。」

平助を兵助と改名

それでおまえの名は。

平助です。「ウム……平助もよいが、兵助（ひょう助）の名にした方がよい。兵助は平助より一段、格が上の名だ。」
さあ大へん、大道芸人中平助だけが刀をさすことを許され、それに有難いことに改名まで賜ったので、飛び上って喜んだ平助、早速古道具屋へ駆けこみ、脇差一本を買い求めた。今度は本物の刀を使ってやったところ、町奉行が賞めた大道芸人だとの評判で忽ち黒山のように人が集まり、うわさはうわさを呼んで大道の人気の焦点となり、お蔭でガマ膏薬は売れるは売れるは話の外だ。

大量に仕入れた薬はまたたく間に売れ切れてしまった。

さて名も兵助に改められ、ガマ油の売口上がすっかり板についた兵助は「これからはこれで身を立てよう。」と決心して問屋の主人に事情を話して暇をもらうことになった。

然しその頃は兵助も二十二才になり、木場で帳簿係まで仰せつかっていたので、主人も始めは、納得しなかったが、とうとう兵助の熱情に負けてしまった。

それから江戸の人気を一身に集め、ふところ工合もよくなり、子どもたちも成長し、やれやれ一安心という身になった。月日の立つのは矢の如く、江戸へ出てから早四十年過ぎた。(五十七才)

お墓参り

寄る年波はあらそわれず、永年の苦勞で老けこんでしまった兵助は、金にも、時間的にも余裕が出来たので、長男の長助を町奉行の許を得て第二代の兵助として襲名させ、自分は隠居の身となり、こゝらで筑波山お礼参りかたがた生まれ故郷の永井村を訪ねることになった。

国を出てから便りも無いまゝの四十年、なつかしい山河、寺、人、民家特に尊敬していた住職、可愛がられた父、一体どうなっているのだろうと六日がかりの道中を心配しながら真先に寺を訪ねて見ると、もう住職も父もこの世の人ではなかった。兵助一生涯のうちでこれ程悲しんだことはないだろう。今は無き二人の霊を墓前にうやうやしく弔らい、淋しく江戸に帰ったという。

永井寺に葬られる

その後兵助は何才まで、生きてかは、わからないが、遺骨は江戸に墓所を求めて葬られたが、せがれの長助も親孝

行だったので、数年後わざわざ永井寺に分骨を持参し、住職の許しを得て、祖父佐助の眠っている墓所の側にねんごろに葬ったという。

何時も夢に見たであろう故郷の土にかえった兵助はどんなにか喜んだであろう。又今も尙草葉の蔭でガマ油の口上を風に託して口ずさんでいるかも知れない。

記録によると

永井寺（普門院成就寺）

○ 文明六年（五〇六年前） 建立（西歴一四六九年）

○ 弘治四年（四一九年前） 全焼（"一五五六年）

←→ 一七六年間

○ 延享五年（二二九年前） 再建（六角堂大聖院慈芳五世代長意 一七四七年）

○ 宝暦三年（二二三年前） 客殿・庫裡焼失 一七五四年

○ 本堂は明治初期より末期まで永井小学校舎として使用

○ 本尊不動明王像は全境内のお堂に安置

新治村中央公民館長

岡

田

富美也